

# キャリバンの肖像

山崎カヲル

松本光太郎さんに

La peur et le courage de vivre et de mourir  
La mort si difficile et si facile

Paul Éluard

はじめに

本稿は1611年に初演され、1623年のいわゆるファースト・フォリオで活字になったウィリアム・シェイクスピアの晩年の戯曲『テンペスト』に対する、ひとつの小さな註釈である。それはクリストバル・コロン（コロンブス）の有名なサンタンヘルあての書簡（1493年2月15日づけ）によって開始された、新大陸（アメリカ）をめぐる繰り出されてきた膨大な量にのぼる言説群の一部と『テンペスト』をテキスト的に交差させることで、後者のなかにたたみ込まれてはいても、明示されていない特定の主題、つまり、植民地という主題を浮き彫りにする作業と深くかかわっている。したがって、植民地言説による解釈は基本的な大前提とされており、そのこと自体の当否はここでは問わないことにする<sup>1)</sup>。

私はもちろん、イギリス文学の研究者ではないし、17世紀初頭も私の歴史的関心からは少しはずれた時期なのだが、新大陸に関してヨーロッパが紡いできた諸言説の研究にとって、『テンペスト』は決して無縁ではない。それどころか、『テンペスト』を通じてあぶり出されるいくつかの主題は、16世紀の新大陸での事情に端を発しており、また、16世紀の現実や観念の新たな読み直しを迫っている。その意味で、私の主要な関心事のひとつ（16世紀新大陸におけるスペイン植民地主義の諸様相）と隣接しているのである。

もちろん特に近年、『テンペスト』を植民地主義とのかかわりにおいて読み解くことについては、さまざまに懐疑的な声が挙がっていることは了解している。たとえばヴァージニア・メイソン・ヴォーンとオルデン・T・ヴォーンによる『テンペスト』論集（Vaughan and Vaughan 1998）は、明らかに植民地言説批判の立場に立っているし、また、ジェラルド・グラフとジェイムズ・フェランが編んだ論文集（Graff and Phelan 2000）では、植民地言説

## キャリバンの肖像

を代表する2論文のあとに「挑戦への反応」として、そのような読解への懐疑・批判が並べられている。とはいえ、「精神分析」的な読みによって、キャリバンを「幼児期における自我の発見」という『異人』への永遠で普遍的な態度」なるものに解消して、植民地という「危険な」存在から完全に切り離す論文 (Skura 1989) を別とすれば、多くの論者は多少とも植民地との関連を口にしている。デイヴィッド・カスタンは植民地言説が『テンペスト』の「目下での支配的言説」だと断定しながら、「芝居が扱っている出来事は、両アメリカよりも、むしろヨーロッパでの政治的諸問題と共鳴しているように思える」といって、力点の置き方を変更するよう提唱している (Kastan 1999: 185-90)。また、コンスタンス・ジョーダンはキャリバンのなかにイングランドにおける「政治的『隷属』」に関する議論を組み入れながら、「芝居には植民地主義言説の諸要素が含まれる」とはいえ、基軸になっているのは暴政をめぐる諸問題だと述べている (Jordan 1997: 173n)。このように、植民地とのかかわりを一方ではなにかしが認めながらも、しかし、その役割をわずかなものと見なして、ヨーロッパ大陸や地中海世界との関係を重視する傾向がしだいに力をえつつあるようである。マルクス主義者を名のるウォルター・コーヘンですら、『テンペスト』には植民地主義を正当化する主張は存在しておらず、キャリバンは反帝国主義を口にできるし、最後には「おそらくは」解放されていると語ったあと、シェイクスピアの他の芝居での対外拡張の扱いをも比較検討して、こう述べている。「ここで示された証拠や議論が示唆しているのは、シェイクスピアの戯曲が、商業的拡張の衝撃を適切に表示したにしても、根本的に異なって見えたりはしないし、この拡張が芝居の背後にある基本的な力でもなかったことである。」 (Cohen 2001: 149, 153)

もっとも、植民地言説の強力な推進者であるピーター・ヒュームは『テンペスト』の「節合原理」として植民地言説を挙げているが、それは必ずしも新大陸とのみ関係させられていたわけではない<sup>2)</sup>。彼はさらに近年では『テンペスト』の新大陸とのつながりを維持しながらも、大陸ヨーロッパや地中海との結びつきにも目配りをしている (Cf. Hulme and Sherman, ed.: 2000)。その意味ではカスタンのように『テンペスト』のアメリカ化はそれ自体が文化帝国主義の行為かもしれない」といった挑発をすることは、あまり生産的ではあるまい。

さらに、植民地言説の支持者のなかでも、それがアメリカ大陸とだけかかわっているわけではないという議論も存在する。ピーター・ヒュームと並んで植民地言説を提唱したポール・ブラウンの議論では (Brown 1985)、アイルランドとの関係が大きな位置を占めている。このアイルランドへの注目は、デインプナ・キャラハンに受け継がれている (Callaghan 2000: chap. 4)。また、アニア・ルーンバはアフリカ大陸との複線的な連なりを掘り起こそうとしている (Loomba 2002: 163ff)。

こうした複数の導線の存在を認め、それらをひとまとめに重層的決定ということばでく

ってしまうことも可能であろう。だが、そこに重なり合っている諸層のひとつひとつを抽出する作業がなければ、つまり、地層学的な検討がなければ、重層的決定とは知的怠惰のいいわけにすぎなくなってしまう<sup>3)</sup>。私は高校時代、地学研究会に属していて、クリノメーターやらピッケルやらで「武装」して、わずかに顔を出した断層を調べて、特定の地層がどのように褶曲しながら、どの方向に走っているのかを追跡した経験がある。本稿はそうした経験を、別のかたちで再現するものである。

### キャリバン——What's in a Name

キャピュレット家の恋に狂った小娘の夢想とは異なって固有名詞は決してあっさりとは片づけることができない。名前を与えるとは、ある社会の名称システムの内部に対象をしっかりと位置させることであり、そのことによって異なる存在を引き寄せ、私たちにとって無害なものへと馴致することにほかならない。だからそれは、ニーチェによれば「所有する」ためになされる「支配者の権利」(das Herrenrecht)の一部をなしている(『道徳の系譜学』)。あるいは、デリダ風に命名行為そのものを「原=暴力」と呼んでよいかもしれない(『グラマトロジーについて』)。実際、劇中に登場する人物のひとりを「キャリバン」と名づけることは、その背後でなんらかの権力関係が働いていることにほかならないのである。その権力作用を解きほぐすことが、当面の課題である。

そのような支配者の「権力表明」(Machtäußerung)に無神経な人々だけが、それはもしかしたらジプシー(ロマ)語の *caulibon* と関係しているかもしれないといった、まったく恣意的な揣摩憶測を展開できるのである。キャリバンはそのように恣意的なあれこれの「起源」と結びつけるべきではなく、はっきりとした歴史的背景を担った名前である(劇中での彼の多岐にわたる曖昧な表象がいくつものイメージの重層化からなっているととしても、それは名称と別の話である)。

さて、18世紀終わりにリチャード・ファーマーがキャリバン(Caliban)とはカニバル(cannibal, canibal)のアナグラムだと述べて以来、アナグラム説はほぼ通説だとされてきている。新しいケンブリッジ版『テンペスト』(2002年)においては、デイヴィッド・リンダレーは「この名前は『カニバル』のアナグラムだと一般に想定されているが、ロマ語の *caulibon* (「黒く暗いもの」)を含めて、別に多くの多少とも怪しげな示唆が提出されてきている」(T\_Lindley: 88)と、あまり歯切れのよくない注釈をつけている。さまざまな説を列挙することで、特定の力ある解釈を希釈し、霧散させてしまう作戦に対しては、注意しておく必要がある<sup>4)</sup>。ここではキャリバンという名前が、カリブ人、さらには人喰い(カニバル)へと連なる強い響きを持っていることを、アナグラム説を仲介させることなしで論じることにしたい。

## キャリバンの肖像

南米大陸のカリブ海側沿岸地域（ティエラ・フィルメと呼ばれた）には、カリバーナ（Caribana）という名称の地域が長く存在していた。このカリバーナがキャリバンの語源である可能性については、ヴォーン夫妻も触れている。ただ、彼らはカリバーナという地名をめぐる複雑な歴史過程を知らないために、せっかくの言及が中途半端に終わっている。ヴォーン夫妻のいうところを、まずは聞いてみよう。

「シェイクスピアが彼のキャリバンをカリブ人ではあってもカニバルではないと意図したのだという可能性は、16世紀後半の地図学から若干の支持を獲得している。というのは、『カリバーナ』という地名が南アメリカ北部に、ほとんどつねに太字で現われているからである。シェイクスピアの眼がこの名前を捕らえていたのであれば、彼のキャリバンは必ずしも島の住民ではなかったにしろ、新世界の先住民として意図されていたかもしれない。そのうえ、多くの地図が人喰いの装飾図で飾られており、ときにはそれがこの地名の近くに置かれていたので、『カリバーナ』は人喰いをもかなりの程度示唆していたかもしれない。いずれにしても、1611年までには『カリバーナ』は地図上の名前として十分に通用しており、シェイクスピアに手頃な材料を提供していた——もし彼がキャリバンに、アメリカ大陸の地名のアナグラム化された名前を与えたいと思ったのであれば、だが。」（Vaughan and Vaughan 1991: 28）

ここではカリバーナはもしかすると食人に関係した地名かもしれない、といった程度の扱いを受けているにすぎない。だが、この名前にかかわる歴史的な推移は、はるかに複雑であって、ヴォーンたちよりももう少し詳しい検討が必要になる。

カリバーナは地名としてはクリストバル・コロンの有名な『航海日誌』にまずは登場するが、それが旧大陸でよく知られるようになったのは、ピエトロ・マルティーレ・ダンギエラによってである（『航海日誌』は19世紀初頭に活字化されるまで、ごく少数の人々にしか接近可能でなかった）。この地名が地図のうえに登場するのはかなり遅く、16世紀中葉である。そして、17世紀後半に入ると文字による記述からも地図上の名称からも、なぜかほとんど完全に消え去ってしまう。この過程を追ってみよう。

ヴォーン夫妻はカリバーナが示されている地図の具体例として、テオドール・ド・ブリのもの（1599年）を挙げ、さらにはオルテリウス（1570年）を下敷きにしたハクルートの地図（1589年）をも掲げている。私が調べたかぎりでは<sup>5)</sup>、16世紀の世界地図にカリバーナという名前が登場したのはもう少しまえで、ルーヴァンで1541年に制作されたメルカトルの地球儀がはじめてである（Shirley 1983: 87-9）。ついで1569年のメルカトル地図にも記載され、その翌年に出版され、きわめて影響力が大きかったアブラハム・オルテリウスの『世界舞台』（Theatrum Orbis Terrarum）でも採用されている。オルテリウスのこの地図帳（Ortelius 1991）は、世界の全体と各地の地図の様式を統一したものとして、地図史上名高いのみならず、プトレマイオスの伝統にはっきりと別れを告げた「新しい」地図を提供して

いたのであり (Broc 1986: 180), 1606年には英訳も刊行されていた (Ortelius 1968)。メルカトルとオルテリウスが採用した地名は、16世紀後半のほとんどの世界地図で受け入れられていたといつてよい。

このカリバーナという地名は、もともとはクリストバル・コロン (コロンブス) が第一回航海でエスピノーラ島の一地方をカリバータ (Caribata) と呼んだことにはじまる。それがのちにはカリバーナと呼ばれるようになったとされる<sup>6)</sup>。この地名はエスピノーラ島から出て小アンティリヤス諸島に移動し、やがて南米大陸北部の探索が進むにつれて、さらにそちらに転移してしまったらしい<sup>7)</sup>。カリブ人はもともとカリブ海諸島だけでなく、その周辺の大陸にも広く居住していたのだが、スペイン人は島嶼カリブ人と大陸カリブ人の双方を、要するに人喰いだとしてまったく同一視していた (実際には両者のあいだには、言語や文化に関していくつもの差異があったにもかかわらず)。カリバーナが島から大陸に移動したのは、こうした事情を背景にしていると思われる。

カリバーナがひとつの島だという言明は、イタリアのシモーネ・ダル・ヴェルデにある。彼は1494年3月20日にバリャドリーから出した手紙のなかで、新大陸の人喰いについて「彼らの国あるいは島はCharibaと呼ばれている」(Chiamasi il paese loro, overo l'isola, Chariba) と語っていた (NMI: 617)。これは彼によれば、コロンブスの第2回航海につきしたが、途中で帰国したアロンソ・デ・オヘダからえた知識だとのことである。ここではすでに、「カリバ」はひとつの島だとされており、エスピノーラ島の一地方から外に迷いだしている。大陸でのカリバーナがいつはじめて地名として登場したのかは、いまだに最終的に確認できていないが、私が知りえたかぎりでそのもっとも早い登場は、ピエトロ・マルティーレの記述にある。イタリア生まれのこの人文学者はスペイン宮廷にいて、コロン以下の航海者たちから直接に話を集め、それをヨーロッパ各地に送り出していた。大陸の地名としてのカリバーナについては、1555年のリチャード・イーデンの英訳 (おそらくシェイクスピアが読んだと思われる) を使うと、マルティーレはつぎのように述べている (Martyr 1885: 107)。

「そこからさらに航海をつづけて、彼 [アロンソ・デ・オヘダ] はウラバの東岸に向かったが、そのウラバを土地の住民はカリバーナと呼んでおり、そこから島嶼のカリブないしカニバルが名前と出自とを持ったのだといわれている (from whence the Caribes or Canibales of the Ilandes are sayde to haue theyr name and originall)。」<sup>8)</sup>

つまり、カリバーナはカリブという、さらにはカニバルという名称の発祥のもとだとされていたのである。先に引用しておいたヴォーン夫妻の「人喰いをもかなりの程度示唆していたかもしれない」といった曖昧な推測とは異なり、カリバーナはカニバルの出生地そのものなのである。カリバーナという地名がカリブ人という名前の起源だという説を唱えたのは、マルティーレだけにとどまらない。ロベス・デ・ゴマラもこう述べている。





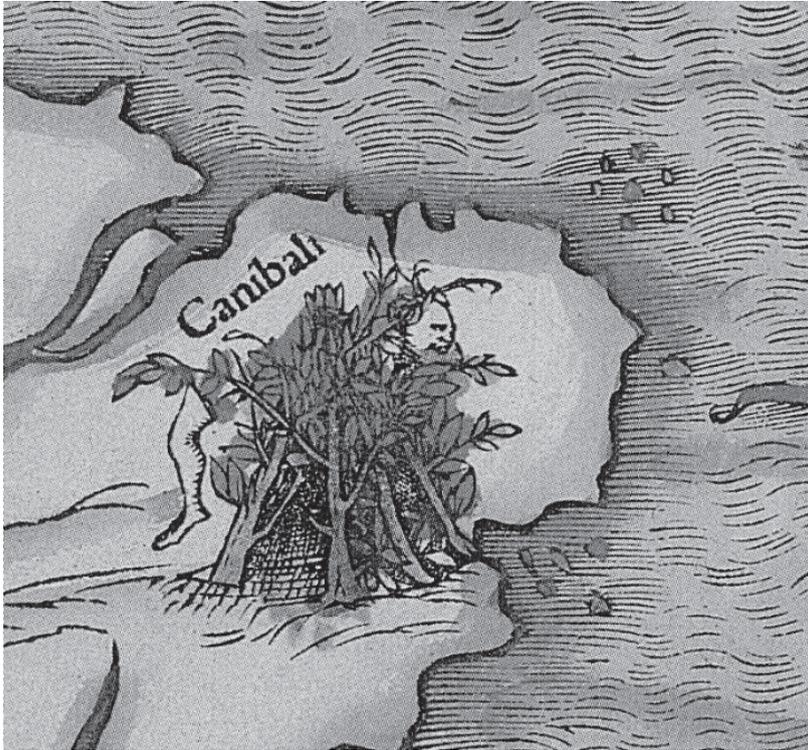


図4 ゼバスティアン・ミュンスター地図

記されるだけで、そこが人喰いの住まう場所であることをつねに密かに私たちに伝えている。実際、オルテリウスのあとでも、カリバーナではなく Canibali を使いつづける地図制作者もいたのであって、多少とも地図に親しんでいた当時のヨーロッパ人にとっては、カリバーナとカニバルとは互換的な名称だったとってよいだろう。

キャリバンという名前はほぼ確実に、このカリバーナに由来している。フランスで1592年に出されたシモン・ジローの世界地図 (Globe du Monde) では、カリバーナは Calibane と表記されており (Shirley 1984:198)、発音的にはカリバンないしカリバナということになる。キャリバンはもう、すぐ近くにきている。もちろん、Caliban と Caribana とでは l と r の違いがあるが、この違いは決して大きなものではない。シェイクスピアの時代には、特に外国の地名や人名に関しては、l と r とが混同されがちだったことは知られている。それは『テンペスト』において Algier がファースト・フォリオで Argier と表記されていた (1.2.261) ことから判る (これはなにもシェイクスピアに限られてはいない<sup>10)</sup>)。つまり、キャリバンとカリバーナとは Cal (r) iban と Car (l) ibana という異字体のあいだでの問題にすぎないと言ってよい。なにもアナグラムを持ち出す必要さえないのである。

とはいえ、名称の問題はキャリバンをカニバルだと同定する決定的な証拠といえるもので

はないので、私たちはさらなる探索をつづける必要がある。

### 奴隷と臣下のはざま

劇中でキャリバンはプロスペローの専制支配を打倒する陰謀を企て、そのために島に流れついた飲んだくれのステファノーを新しい王に仕立てて、彼に臣従を誓い、プロスペローの殺害を求める。

この陰謀の基本性格についてのこれまでの解釈は、ほとんどが満足のゆくものではない。多くの論者はこの叛乱の企てに対してかなり冷淡であり、たとえばジンバードは「キャリバンはつまるところ、単にひとりの主人を別の主人と交換しているにすぎない。…彼が望む自由は幻想でしかない。というのは、彼はすでにおのれが奴隷になることを誓っているからである」(Zimbaro 1968: 240-1)という。ルーベン・ブラウワーもキャリバンが言祝いだ「自由」とは「ただの主人の取り替え」(simply a change of masters) にすぎないと述べているし (Brower 2000: 192), ロジャー・ウォレンも同様に、「キャリバンがステファノーに跪いてプロスペローからの自由を宣言するとき、彼は明らかにひとりの主人を別の主人と取り替えたのだ」(Warren 1998: 169) と語っている。スリグレイにいたっては、ステファノーとトリンキュローが創るであろう「新しい社会的位階構造」においては「キャリバンは彼らの奴隷になる」とまで断言している (Strigley 1985: 108)。要するに、主人を取り替えてみても、キャリバンのもともとの隷従状態にはなんの変化もなく、プロスペローからステファノーへと主人の名前が変わっても、キャリバンに関しては同一の支配を体現しているにすぎないのだというわけである。

だが、こうした冷笑的解釈は根本的な誤解、つまり、当時の歴史的な社会関係への無理解からくる誤解の結果にすぎない。というのは、キャリバンがステファノーとのあいだに築こうとした関係は、それがたとえ極度に戯画化されて描かれてはいるにしても、プロスペローとのあいだでの関係とははっきりと質的に異なったものだからである。この決定的な差異について、私が知るかぎりではあるが、これまでシェイクスピア研究は正面から取り上げたことはなかったと思われる<sup>11)</sup>。

それは17世紀初頭のイングランドにおける、エンクロージャー運動による大量の浮遊民の誕生と、穀物価格の高騰に対する民衆の怒りなどによる、不穏な情勢が支配階級の一部にもたらした叛乱への恐怖と深くかかわっている。この民衆蜂起については、シェイクスピアは特に『テンペスト』の少しまえに執筆した『コリオレーナス』で主題化している。それは「多頭の群衆」であり「ヒドラ」であり「多頭の獣」であった (Cor. 2. 3. 15-6; 3. 1. 93; 4. 1. 1-2)。この恐怖が植民地主義の提唱と結びついていたことは、リチャード・ハクルートが有名な植民地推進提案である『西方植民地論』(1584年)において、「わが王国の内部には、

キャリバンの肖像

仕事につくつものない何千という怠けものがいて、反抗的であったり、国家の変更 (alteration in the state) をくわだてたりしている」(NAW 3:82) と述べていることから明らかであろう<sup>12)</sup>。

ところで、『コリオレーナス』では市民たちは結局のところ、丸めこまれて暴動にまでいたっていないが、『ヘンリー 6 世・第 2 部』におけるジャック・ケイドの叛乱は、シェイクスピアが描いたほとんど唯一真正の (なつかしいエンゲルスの表現を借りれば) 「下からの」(von unten) それなのである。この叛乱が『テンペスト』でのキャリバンの陰謀とのあいだに持っている共通性には触れておくべきであろう。支配階級のあいだでの対立にもとづく、権力の水平方向での移動 (ミラノでの権力篡奪もナポリ王の暗殺未遂もこれでしかない) とは異なって、両者はともに垂直方向での権力転覆の試みであり、また、そのさいに表白される「書き文字」への並々ならない憎悪を共有もしている<sup>13)</sup>。こうした共通点はほとんど無視されてきたが、権力の垂直的顛倒とかかわる重要な論点として見逃すべきではなからう。それはよくいわれる祝祭空間における象徴的顛倒と近接してはいても、はるかに現実性のある権力闘争であった。

キャリバンの叛逆が主人の単なる取り替えではないことを示すためには、臣下 (subject) と奴隷 (slave) というふたつの社会身分についての、当時の一般的な了解を考える必要がある。ファースト・フォリオ版に収録された『テンペスト』の末尾には、登場人物の一覧表がついている。この一覧表がシェイクスピア自身の手になるものなのか、あるいは筆写者だったラルフ・クレインによるものなのかはいまだに確定していないが (確定できる素材は目下のところ皆無なようである)、そこでのキャリバンについての説明は周知のように「野蛮で畸形の奴隷」(salvage and deformed slave) である。「野蛮」と「畸形」という形容は別個に考えるとして<sup>14)</sup>、「奴隷」という点から話をはじめたい。

キャリバンがプロスペローによって、そしてプロスペローの娘ミランダによって奴隷として認識され、そのように扱われていることは疑いえない。キャリバンがはじめて登場するのは第 1 幕第 2 場であるが、その第 309 行から第 345 行にかけて、島の支配者プロスペローに短いあいだに「わしの奴隷のキャリバン」(Caliban, my slave) 「奴隷のキャリバン！」(slave! Caliban) 「この不快な奴隷」(thou poisonous slave) 「このまったく嘘つきの奴隷」(thou most lying slave) と、4 回も繰り返して奴隷と呼ばれている (1. 2. 309; 314; 320; 345)。ミランダもその直後に父親に呼応して、「嫌らしい奴隷」(abhorred slave) だと彼をののしるのである (1. 2. 352)。

ドレイパーによるなら、当時の演劇では劇中人物の特性は一般に、初登場のさいのせりふで与えられるとされる (Draper 1992: 91)。であればこのようなかたちで最初に濃密な呼びかけが置かれている以上、キャリバンはまさしく奴隷なのだ観客の耳に強く印象づけられるであろう。

プロスペローに仕える精霊のエアリエルも一度だけ、プロスペローから「わしの奴隷」(my slave) と呼ばれている (1.2.270)。だが、これはエアリエルが直前に示した反抗的な態度にいらだったための乱暴なことば遣いにすぎない。エアリエルは基本的には「従僕」(servant) なのであり (1.2.187; 4.1.33), しかもその奉公は期限を限ったものである (1.2.242-9)。これは当時では「年季奉公人」(indentured servant) と呼ばれた人々の特徴にほかならない (T\_V & V: 166)。年季奉公人はイギリスでは定められた契約期限内では売買さえ公式に認められていたように、現実生活ではほとんど奴隷に等しい扱いを受けていたし、新大陸における英領植民地でも、17世紀中頃までは労働力の主流を占めていた (Beckles 1966: 572-4)。だが、彼らの隷属状態はあくまでも期限つきのそれであって、主人による公的な解放 (manumission) という特別な手つづきがなければ永続的に労働を強制され、子孫にいたるまでそれが継続する奴隷とはとうてい同一視することはできない。

しかし、だからといってキャリバンを単純に奴隷だと見なすことは不可能である。というのは、彼を劇中で奴隷と呼ぶのはプロスペローとミランダだけであって、キャリバン自身はみずからが奴隷であることを、劇中ではただ一度たりとも是認してはいないからである。彼が唯一きっぱりと認めている自分の身分は、プロスペローの臣下 (subject) だということではない。

おれはあんたが持っているひとりだけの臣下 (am all the subjects that you have) だが  
最初はおれが自分の王様だったのだ

と彼はプロスペローに向かって断言している (1.2.342-3)。このせりふに対してプロスペローはいかなる反論もしていないので、相手の言い分を暗黙裡であっても認めていると見てよいだろう。キャリバンはまた

まえにいったように、おれは暴君の臣下だ (I am subject to a tyrant)

と語っており (3.2.40)。さらに「おれが臣従する暴君」(the tyrant that I serve) と主張している (2.2.162)。自分が臣下なのだという点での彼の姿勢は、完全に首尾一貫したものである。

それに対して、ステファノーとの関係はどうであろうか。プロスペロー殺しを依頼するかわりに、彼はステファノーをみずからの王に選ぶ。この酔いどれとの関係においても、自分がなるのは臣下だという主張が断固として展開されている。「その酒瓶にかけて、おれはあんたの真の臣下になるよ」(I'll swear upon that bottle to be thy true subject) 「おれはあんたの臣下になると誓うよ」(I'll swear myself thy subject) 「あんたは島の君主になって、おれは

## キャリバンの肖像

あんにに臣従するよ」(Thou shalt be lord of it, and I'll serve thee) と、彼は繰り返して述べる(2.2.122; 149; 3.2.55)。

キャリバンはいかなる意味でもステファノーの奴隷になるつもりはないのである。ステファノーのほうもそれに呼応して、「この哀れな怪物は、おれの臣下だ」(The poor monster's my subject) といっており(3.2.34-5), 2度にわたって「臣下の怪物」(Servant monster) だとも述べて(3.2.2; 3.2.7), キャリバンが「怪物」のような存在ではあっても、おのれの臣下であることを確認している。ナボリの酔っ払い、キャリバンに乞われて王となり、それゆえに臣下を持つのである。周知のようにマルクスは、『資本論』のなかで、王と臣下についてつぎのように述べていた。

「たとえばこの人間が王であるのは、ただ他の人々が彼に対して臣下としてふるまうがゆえでしかない。ところが反対に彼らは、彼が王であるがゆえに、自分たちは臣下だと信じているのである。」(第1巻第1章第3節註)

このマルクスの見解に照らしてみると、キャリバンは関係論的な反照規定をきちんと理解していたことになろう。彼にとってプロスペローは、臣下を合意によってではなく、むきだしの暴力によって支配するがゆえに「暴君」(tyrant) なのであり、そこでの彼の身分は本来なら王に仕える臣下のはずなのに、暴君によって奴隷だと一方的に宣告され取り扱われているのである。しかし、ステファノーは彼が選び取った王であり、この自由な選択の結果として彼はかなり卑屈な表現を使い始めるが、臣従してはいても自由な存在なのである。「新しい主人」への臣従を誓ったあとに、キャリバンが「自由だ、お祝いだ、自由だ、お祝いだ、自由だ、お祝いだ、自由なんだ」(Freedom, high-day; high-day freedom; freedom high-day, freedom) という歓喜の声を挙げているのは(2.2.181-2), ステファノーのもとではみずからがもはや奴隷ではなくなったと自己認識している結果であって、ここで言祝がれている自由は、いかなる意味でも「幻想」(ジンバード) ではない。

最終的にプロスペローは「この暗黒のモノ(this thing of darkness) は、私のモノだ」と述べて、彼を奴隷として再回収している。この「暗黒のモノ」という表現に関しては、ティリヤードのように存在の階梯に着目して、「人間の頂点」であるプロスペローでさえ、「みずからのうちにある獣的なもの、つまり、キャリバンを決して完全には取り去ることができない」と新プラトン主義的な解釈に流し込んだり(Tillyard 1972: 42), あるいは、「彼はこうしたことばを、所有宣言としてのみ意図したのかもしれないが、そこに親近性のより深い認知、半自覚的な罪の自白を聞き取らないでいるのは難しい」(Greenblatt 1988: 157) と、プロスペローがおのれの暗い半身をキャリバンのなかに認めたのだとする解釈がある。だが、こうした心理主義的解釈(それを完全に否定するつもりはないが)よりもまず、アリストテレス以来の長い伝統において、奴隷がまずもって「モノ」(thing) として所有物=財産(ktema) の一部だったことが確認されてしかるべきだろう。先に触れたように、エアリエ

ルがプロスペローによって奴隷呼ばわりされたさい、「性悪なモノ」(malignant thing)と「鈍いモノ」(dull thing)と2度にわたって「モノ」だといわれていることから判るように(1.2.257;285), 奴隷は人格ではなくアリストテレス以来まさしくモノなのであり, プロスペローはそのことを決して忘れないでいる。エアリアルを奴隷=モノだときめつける彼の発想を前提にして「暗黒のモノ」という表現もまずは理解されるべきであろう。「こいつらのうちのふたりは, 知っておられるようにあんたがたの所有物だが, この暗黒のモノは私のモノだ」(5.1.274-6)というプロスペローは, いったんはこれまでの支配—従属関係から離脱して, あまつさえ叛逆までも試みた連中を, その浮遊状態から再度旧来の関係へと着床させる。それはJ・L・オースティンの用語を借りるなら, 事実確認的であると同時に行為遂行的な言語行為にはかならない。

ここで再確認しておくが, 少なくともステファノーとの主従関係の成立のさいには, 臣下になるというキャリバンの自発的な意志が前提されている。それはあくまでも誓約関係の産物なのであって, 主人と奴隷という一方向的で直接的な暴力が紡ぎ出す関係性は, そこにはまったく存在していないといってよい。主人と臣下という関係性は, 主人と奴隷というそれとははっきりと区別されて考えられなければならない。

このことから生じるきわめて重要な問題がある。キャリバンみずからはプロスペローの臣下という身分にあると言いたてながら, 同時に主人によって奴隷だと見なされていることが, それである。これによって開示される事態は, 16世紀の歴史的現実と対比すると, 私たちにこれまで『テンペスト』をめぐっておそらくは提起されたことがない主題を明らかにしてくれる。

それはどのような問題なのか。

16世紀のヨーロッパ(とりわけスペイン)は新大陸において, すでに長年の宗教的・政治的敵対勢力として一定の処遇法を定められ, それにしたがって対処していたイスラム教徒とはまったく別個の基準によって処遇しなければならない, 文字通り新しい人々の存在に直面していた。この人々を臣下と奴隷というふたつの相容れないカテゴリーのなかにどう収容するかという理論的かつ実践的な難問が, そのさいに浮上していたのである。

まずは奴隷の問題を概観してみよう。最初に確認しておくべきなのは, この時代, 奴隷制は少なくとも西ヨーロッパの内部では, 基本的な社会関係ではなかったことである。新大陸植民地での労働力需要をまかなうために, 黒人奴隷の大量導入に踏み切っていたスペインやポルトガルでさえ, 自国内では奴隷はおよそ支配的な生産関係の一部とはなっていない。イギリスでも16世紀になると, もはや身分としての奴隷はほとんどまったく消滅していた。封建時代の農奴所有者の多くは単なる農地所有者に転換しており, 大部分の農民は現在からすれば奴隷に近い過酷きわまる状態を生きていたにせよ, 形式的には「自由な」借地農であった。アイルランドに奴隷制を導入しようという企画は失敗していたし, サマセット

## キャリバンの肖像

による「浮浪民」の奴隷化の試みも同様であった (Blackburn 1997: 56-7)。西ヨーロッパ諸国にとって、奴隷が大きな比重を占めたのは、大西洋を越えて獲得された巨大な植民地、いわゆるアメリカにおいてでしかなかった。新大陸を征服して分け合ったスペインとポルトガルは、主に鉱山労働と農業での酷使と、持ち込まれた疫病との結果とである急激な先住民人口の減少を、アフリカからの奴隷労働の輸入によって補填していた。近代における最大規模の奴隷制は、そこではじめて展開されている。ただ、注意しておきたいのだが、少なくとも『テンペスト』初演の段階では、イギリスの植民地政策は奴隷の利用にいまだにまったく踏み切ってはいなかった。確かに1564—65年の有名な航海で、ジョン・ホーキンスはアフリカ西海岸で多数の黒人奴隷を購入したあと、彼らをカリブ海各地で売り払っているが、それはスペイン人向けの商業活動の一環であって、自国の植民活動に奴隷を組み込むこととは無縁であった。実際、ニューファウンドランドやヴァージニアといった入植の試みは『テンペスト』の時期には奴隷労働とはおよそ無縁であって、北米各地やカリブ地域でイギリス人が本格的にアフリカ人奴隷を煙草や砂糖のプランテーション労働に投入するようになるのは、シェイクスピアの死後、17世紀半ばからなのである。

とはいえ、ここで扱われるのは、イングランドのいまだに限定された入植地の話ではなく、新大陸先住民と奴隷制の関係である。『テンペスト』がかかわっているのは、まさしくその関係だからである。キャリバンが置かれている2重拘束状態を理解するためには、アメリカ大陸の先住民が同時代に置かれていた状況への理解が不可欠である。

だが、この点でも、実はイングランドは私たちにほとんどなにも与えてくれない。先住民を抹殺すべきだとか、奴隷にすべきだという激烈な議論は、1622年のヴァージニアでの大規模な先住民蜂起をきっかけに公然と主張されるようになるが、この叛乱は周知のようにシェイクスピアの時代には属していない。北米植民をめぐってのそれまでのかなりの数にのほる言説を調べてみても、それらは先住民を奴隷にするという発想とはまるで無縁であった。新大陸先住民の奴隷化という考えは、そこには基本的に不在だったといつてよい。イングランドが新大陸に本格的な奴隷制を導入するのは、17世紀中葉からなのである。

もっとも、シェイクスピア時代のイングランドでは、奴隷制そのものが否定されていたわけではまるでなかった。奴隷の存在は *de facto* にも *de jure* にも認められていた。そこでは理論的に正当化可能な奴隷の条件は決まっていたのである。そうした正当化しうる奴隷制の範囲を明示したテキストのひとつとして、トーマス・モアの『ユートピア』(1516年)を挙げることができる。モアのユートピア人はいちおうは虚構の存在ではあるが、戦争による捕虜、奴隷の子孫、それに他の民族から購入した奴隷に関して、その奴隷身分をはっきりと認めていることで、人間を奴隷にできる当時の「妥当」とされる範囲を教えてくれている。そこで示されている条件のもとで人々を奴隷化することを、16世紀のイギリス社会は肯定していたのである。

このうち、奴隷の子孫は奴隷だとする冷酷な慣習を別にすれば、戦争において捕虜にした人々を奴隷として扱うことは、古代ギリシア以来認められていた慣習であったことはいうまでもない。シェイクスピアの時代にも、サー・ジョージ・ペカムのことばによれば、万民法にしたがうと「運なく戦争で捕らわれるなら、従僕か奴隷 (servauntes or slaves) にされざるをえない」のである (NEW 3: 43)。売買されている奴隷についても、購入以前の状態を基本的には問うことなく、それは認められていた。アメリカ先住民の奴隷化に正面から反対していたスペインの法学者フランシスコ・デ・ビトリアでさえ、売られている奴隷なら「私はそれをあっさりと買う」(yo lo compro llanamente) とまさにあっさりと断言していたし (Cf. Zavala 1967: 157)、シェイクスピアも『トロイラスとクレシダ』で「おまえは野蛮人の奴隷のように…売り買いされる (thou art bought / and sold...like a barbarian slave)」(TC 2.1.46-7) と、それを当然視している。もっと明確なのは、キリスト教徒に対するシャイロックの痛烈なせりふで、「お宅には買い取った奴隷 (purchas' d slave) が大勢おりますな、買ったからという理由で (because you bought them)、犬やロバのように悲惨で過酷なやり方でお使いになっておられる」(MV 4.1.90-3.) といわれているのである。舞台上で設定されている時代も場所も違っているとはいえ、ここで描かれている事態は、シェイクスピアの時代にイングランドで承認されていた奴隷の姿であった。こうした奴隷の存在は、中世の神学者や法学者によって、いわゆる「万民法」(ius gentium) の領域に属することがらとして、すべての人間の生得的な自由と平等を保証する「自然法」(ius naturale) から注意深く区別されながら承認されていたのである。

だが、キャリバンは『ユートピア』で挙げられていたいずれのケースにも当てはまらない。彼はプロスペローによってだれかから奴隷として購入されたわけではないし、戦争で捕虜になったわけでもないのである。もちろん、彼は奴隷の子孫でもない。17世紀初頭にあった支配的な社会通念によれば、キャリバンが奴隷となりうる条件は、ほかにはただふたつしか存在しなかったといつてよい。

その第一は、彼が生得的奴隷だということである。「生得的奴隷」(natural slave) とは、もともとはアリストテレスがつとに理論化したカテゴリーである。ここで詳論はしないが、アリストテレスは主に『政治学』第1巻を中心に、戦争捕虜のような単に「法によって奴隷」(kata nomon doulos) となっている人々 (*Politica*, 1255 a 5) とは異なって、動物が人間に劣るように、魂を持つことなく、ただ身体の使用によってのみ存在意義を持っているような人々を「自然=本性からして奴隷」(phusei doulos) だと規定している (Ibid., 1254 b 21)。

のちのセネカたちストア学派は、彼らのモットーである「すべて人間は自然からして平等である」(omnes homines natura aequales sunt) に端的に表現されているように、生得的な奴隷が存在するというアリストテレスの主張に、まっこうから反対する議論を展開した。このストア学派の考えはキリスト教にも受け継がれていたことを忘れてはならない。後者によ

## キャリバンの肖像

れば、人間は本来すべて生まれながらに自由かつ平等であって、奴隷とはアダムとエバの楽園からの追放のあと、あるいは（こちらのほうがより多く援用されたが）大洪水のあとで、みずからの裸体を見てしまったハムの子供カナンに対してノアが「奴隷の奴隷」となれという呪いを浴びせた（創世記 9. 25.）あとになって、はじめて登場する社会制度だとされていた。わずかな例外を除けば、人間は本源的に自由であり、それに対して奴隷制はまさしく人為が紡ぎだした制度であって、神＝自然とは成立根拠がおおよそ違っているという考えは、アリストテレスがヨーロッパの知的世界で保ってきた強大な権威にもかかわらず、中世から近世にいたるまでキリスト教世界では一般に広く肯定されていたのである（Cf. Davis 1966: chap. 5; Zavala 1975）。現実には、とりわけイスラム教徒との激しい戦いのなかで、異教徒を奴隷にする権利をローマ教皇でさえ臆面もなく口にしていたが<sup>15)</sup>、少なくとも理念のうえでは、アダムとエバにはじまる人間が持っている本源的な自由という建て前は保たれていたといえる。その意味で「生得的奴隷」の根拠づけは、アリストテレスによってのみ与えられたとってよい。

先住民の奴隷化に関しては、インディオが生得的に奴隷であるかどうかをめぐるの、有名なバリエー論争があり、生得的奴隷説を取るセプールベダと、彼に正面から立ち向かったラス・カサスとのあいだでの激論や、それにいたる前史はよく知られている（Cf. Hanke 1974）。この対決に凝縮される思想的な系譜については、シルビオ・サバラがすでに端整な総括をしてくれている（Zavala 1975）<sup>16)</sup>。

新大陸の住民をこうしたアリストテレス的な意味での「生得的奴隷」と見なすことは、スコットランド出身の神学者ジョン・メイジャー（メイヤー）が1510年にパリで、はじめて提唱したとされる（Pagden 1982: 38-41）。インディオたちが「本性からして奴隷」（*quia natura sunt servi*）だという理由として、彼はアリストテレスの権威を引いている。

キャリバンをこうした意味での「生得的奴隷」だと見なすことは、まったく不可能だとはいえない。彼はたとえば、プロスペローによって「いつになったら来るのか、この亀」（*Come, thou tortoise, when?*）といわれている（1. 2. 317）。また、「薪を持ってこい。のろのろやるのではないぞ（*be quick*）」（1. 2. 367）と動作の遅さを咎められてもいる。どうも彼は亀のようにのろろと動き働いているらしい（当たり前だが、怠けたり作業を遅らせたりするのは奴隷の一般的な「権利」である）。ジョン・メイジャーのあとを受けて、アリストテレス流の生得的奴隷説をインディオに系統的に適用したスペインのファン・ヒネス・デ・セプールベダは、「[理解が]遅く愚かではあるが、必要な仕事を遂行するために身体的に頑健であるものたちは、本性からして奴隷である」<sup>17)</sup>と主張していた（Gines de Sepúlveda 1941: 84）。このような見解にしたがえば、キャリバンには「生得的奴隷」という定義は当てはまる。

だが、1611年の時点で、彼のような生得的奴隷説がそのままイングランドで通用してい

たとは、単純にいうことではない。セプールベダとラス・カサスとの論争は、イギリスでは16世紀を通じての反スペイン感情のたかまりのなかで、後者に有利な方向で受け入れられていたからである。とりわけ、新大陸でのスペイン人の残虐な諸行為をめぐる、いわゆる「黒い伝説」(Black Legend)の形成過程において(Cf. Maltby 1971)、ラス・カサスの影響が多ければ多いほど、セプールベダの見解は顧みられることがなく、セプールベダの議論は本国スペインでもほとんどまったく公表されなかったために、イングランドでは詳しい内容紹介などまったくなかったのである。実際、イングランドで読みえたとされるセプールベダの主張は、ラス・カサスの『インディアスの破壊』の英訳(Las Casas 1977)につけられた非常に短い論争の形式的な要約程度にすぎなかったであって、その社会的影響力はほとんどゼロだったと思われる。したがって、キャリバンを生得的奴隷というカテゴリーに充分に収納することはできない。

とはいえ、第二の可能性が存在しており、それが臣下を奴隷に変換する可能性を大きく開いていた。

鉱山開発、荷役、食糧生産といった場面で、新大陸先住民の対価なき重労働を欲していたスペイン人征服者は、ここでは触れないが一方ではエンコミエンダ制度を導入し、他方では奴隷化の可能性を最大限に探っている。この後者の可能性を与えてくれたのが、先住民のあいだに広がっているとされたカニバリズムであり、インセストであり、ソドミーであった。これらの「反自然的」(contra naturam)な行為の実践者には、自然法の規定からして、スペイン人は奴隷とする権利を持っていると、ほとんどの論者は一致して主張していたのである。

たとえば、先住民の奴隷化に反対する法的根拠を構築したことで知られるフランシスコ・デ・ビトリアは、議論のなかで2種類の大罪を区別している。第一は、自然法には反しておらず、人間が作った実定法にのみ反しているもので、このような罪を理由にインディオに戦争をしかける権利はない。これに対して、第二の大罪のほうは、自然法そのものに反しているとされる。彼はいう。

「だが、人肉を喰うとか、母や姉妹や男と無差別につがうといった、自然に反する罪がある。このような罪が理由なら、彼らに戦争をしかけて、彼らにそれらを放棄するよう要求できる。」(Vitoria 1989: 93)

つまり、食人、インセスト、ソドミーという「大罪」は、ビトリアによってさえも「正義の戦争」(bellum iustum)の、したがって、結果としての相手の奴隷化の根拠になっている。これらの大罪を犯している人々は、容赦なく奴隷にすることができるわけである。ビトリアの見解は1539年に行なわれた講義『インディオについて』(De indis)で披露されたものだが、実のところ、それはスペイン王室がすでにそのまえに実行していた法的措置を追認するものでしかなかった。王室はビトリアの議論以前に、本来なら臣下として認める人々のなかで、

## キャリバンの肖像

特定の範疇に入る対象を奴隷にする許可を与えた。つまり、権利的には臣下であるはずの存在の一部を、しかし奴隷にできるという特例を設けたのである。こうした例外をなしたのが、人喰い＝カニバルであった（それ以外にも、やがてスペインの支配に長く抵抗したチリのアラウカノ人も含まれることになるが、本稿の主題からはずれるので言及しない）。

この例外規定を最初にはっきりと明文化したのは、1503年10月30日にイサベラ女王が出した勅令である。それは時には「カニバル法」(Cannibal Law)とまで呼ばれているもので、「カニバルと呼ばれる連中」(una gente que se dice canibales)を「わが臣民に対して犯してきた犯罪」のゆえに捕獲して売り払うことができると定めていた<sup>18)</sup>。この勅令はカニバル奴隷化の解禁宣言であった。「1503年以降、突然数多くのカニバルたちが数多くの場所で『発見』された」(Palencia-Roth 1993: 43)のである。カニバルだと名指されるだけで、インディオたちは唐突に、それまでの臣下という身分から奴隷へと突き落とされた。そしてカニバルであることは、もはやカリブ人だけに限定されず、スペイン人が奴隷労働力を必要とした場合、いたるところで見いだされる特性となった。

もちろん、このような複雑な法的・歴史的過程をシェイクスピアが熟知していたわけではあるまい。しかし、彼の同時代のイングランドは、スペインとの複雑な対抗関係のなかで、また、自国の今後の植民地経営のありうべきモデルの模索において、スペインによる新大陸支配の諸様相に否応なしに注目せざるをえなかったのであって、新大陸「発見」の初期における驚くほどの冷淡さ（大陸各地とは異なって、イングランドではコロムもヴェスプッチも英訳はされていない）に比べると<sup>19)</sup>、とりわけ16世紀後半にかなり集中的に関連するラテン語やスペイン語の文献の英語への移植がなされている（1526年のオビエドを例外にして、マルティーレ＝1555年、ゴマラ＝1578年、エンシソ＝1578年、ラス・カサス＝1583年、さらにアコスタ＝1601年など）。シェイクスピアもおそらくスペイン支配下の新大陸での奴隷の位置づけに関して、なんらかの知識をえていたと想定しても無理はないであろう。つまり、プロスペロー（とミランダ）によって奴隷だとののしられるキャリバンが、自分は臣下だという権利を執拗に主張することのあいだにあるズレは、シェイクスピアにははっきりと自覚されていたといってよい。プロスペローが奴隷とそれ以外の身分との差異を認識していたことは、怒りにまかせてエアリエルを奴隷だとののしったさい、「わしの奴隷 (my slave) であるおまえは自分でいったように当時は彼女 [シコラックス] の従僕 (her servant) だった」(1.2.270-1)というこで、奴隷が臣下＝従僕とは異なる種別的な社会身分であると認識していることから判る。

キャリバンは臣下と奴隷という、ふたつの異なった社会身分のはざまのなかで宙吊りにされているのであって、そのことが新大陸という歴史的文脈のなかで彼をカニバルへと限りなく近づけている。強調しておきたいのは、そのような宙吊り状態は、シェイクスピアの時代には、カニバルだとされた人々以外のだれにも経験されていなかったことである。この点で、

キャリバンは私たちを新大陸へと、まっすぐに誘っている。

### キャリバンと魚と犬

キャリバンがカニバルと密接にかかわっていることへのさらなる傍証として、さらにキャリバンが魚と関係させられていることを挙げておきたい。キャリバンは劇中でなんども「魚」と呼ばれている。

たとえば道化のトリンキュローははじめてキャリバンに出会ったさい、こう述べている。「これはなんだ、人か魚か。死んでるのか生きてるのか。魚だ、こいつ魚みたいな臭いがしてる。古くて魚みたいな臭いだ。」(2.2.24-6) この「奇妙な魚」(a strange fish) について、彼はすぐあとで彼の手足を見て「こいつは魚じゃなく、鳥人だ」と意見を変えるのだが(2.2.27;34-5)、のちになっても彼はまだ、キャリバンが「腐れ魚」(deboshed fish) であり「半分は魚で半分は怪物」(half a fish and half a monster) だといいはっている(3.2.25;28) トリンキュローだけでない。アントーニオもキャリバンをはじめて眼にしたとき、彼を「まったくの魚」(a plain fish) だと呼んでいるのである(5.1.266)、なにか魚的なものが、彼には濃厚にあるらしい。

このせりふをそのまま受け取って、ウィリアム・ホガスは18世紀前半に周知のようにキャリバンをミズカキとウロコとヒレのある手足を持った文字通りの半魚人として画像にしたし、また、キャリバンには「魚に似た」畸形があるのだとする論者もいる(Hankins 1947:794)。カーモドはこう述べている。「彼は魚のような臭いがしており、ギャバジンに隠されているので、おそらく魚のように見えたのであろう。彼は時折魚と呼ばれはするが、それは主に彼の奇怪さに由来するのであって、その外見にはなんら魚らしさがあるべきでない。」(T\_Kermode: 62) とはいえ、彼はその「奇怪さ」(oddity) が、なぜ魚に比定されるのかについては、なんの説明もしていない。また、ヴォーン夫妻は「キャリバンの容貌へのおそらくは字義通りではない言及であり、よりありうるのは彼の臭いへの言及」だとしている(T\_V & V: 281)。ジョン・ギリースも「彼は魚臭く、魚に似ており、おそらく魚のように売られるであろう」と、かなり曖昧な表現で、魚とのかかわりを総括している(Gillies 2000:198)。

確かに、キャリバンが「字義通り」(literal) に魚の外見をしていると見なす必要はないであろう。しかし、彼は魚臭いのだとするカーモドやヴォーン夫妻たちの解釈も、「こいつ魚みたいな臭いをしている云々」という上記のトリンキュローのせりふによって裏づけられはしても、別の意味で「字義通り」であって、それだけではまるで不十分なのである。かのグロスター公リチャードのせりふを借用するなら、シェイクスピアは「ひとつのことばにふたつの意味を込める」(moralise two meanings in one word) 名人なのであって(R3 3.1.83),

## キャリバンの肖像

キャリバンの姿かたちや臭いに字義的な魚らしさを求めるのではないなら、魚が水中に住む生物以外に、なにを当時共時的に意味していたかを考えなければならない。カーモドたちのように「字義通り」の意味を否定するのであれば、探し求められるべきなのは魚の象徴的あるいは寓意的な意味でしかありえない。

魚のシンボリズムは各種のシンボル辞典を調べればすぐに判るように実に多岐にわたっている。しかし、それらの辞典には記載されていないのだが、16世紀にはそれが共喰いをも象徴していたこと、したがって、人間の形容に使われるなら、人喰いを意味していたことを私たちはここで想起すべきである。このことについては、ピーター・ヒュームが魚と間接的な食人とのかわりを指摘しているが (Hulme 1986:108), 残念なことにそれ以上の追求をしていない。この象徴的な連結には長い歴史があって、すでに古代ギリシアにおいてヘシオドスは『仕事と日々』において、魚を含めて動物には一般に神が定めた「正義」(dike)や「掟」(nomos)がないため、人間とは異なって「たがいに相食む」(esthemen allelous)のだと述べていた (Opera et Dies, 274-8)。つまり、魚は共喰い (allelotrophagia) の具体例のひとつであった。

とはいえ、古典古代まで時代を遡る必要はないだろう。シェイクスピアにはるかに近い時代には、フランドル生まれの画家ペーテル・ブリューゲルがいて、「大いなる魚は魚たちを食べ物にする」(Grandibus Exigui Sunt Pisces Piscibus Esca) というタイトル (その下にはほぼ同文のオランダ語が配置されている) を持つ銅版画 (1557年出版) を作っている (図5)。この絵のなかでは、ひとりの男が裂かれた腹から魚をあふれさせている大魚を指しながら、

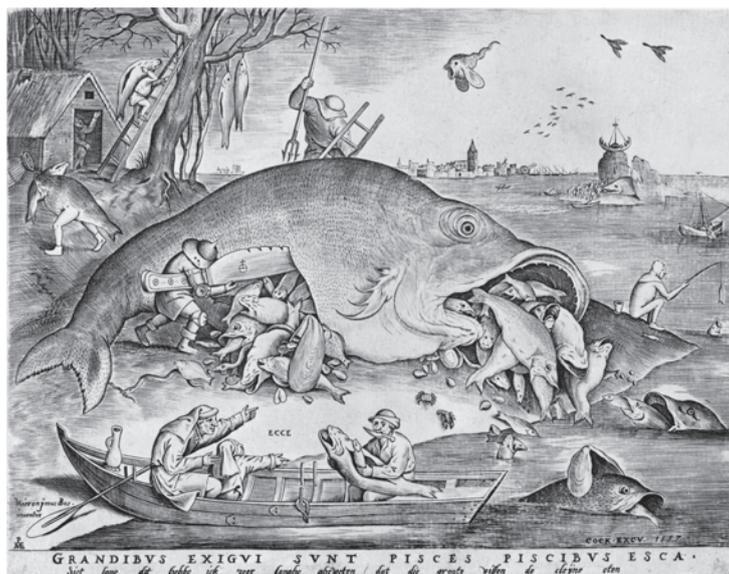


図5 ブリューゲル

子供に「見よ」(ECCE)と述べているのだが、いったいなにをそこに「見る」のかについて、追加的な材料はこの作品では明らかでない。また、原画となったとされる(Hieronymus Bos. inuentor)ヒエロニムス・ボスの絵が現存していないため、とりあえず魚が共喰いと関係しながら、なにかの寓意になっているといった程度の解釈でいまのところは満足しなければならない。この時代、ブリューゲルの故郷であるネーデルラントは、いまだにスペインの苛酷な支配下にありつつ、新旧キリスト教の決定的分裂と密接に関連した激しい争乱を経験していた。カルロス5世がネーデルラントに異端審問所を持ち込んだのは、1550年のことであった。特に、1556年にスペイン王となったフェリーペ2世は頑迷なカトリック主義者で、ネーデルラントで抬頭しつつあった新教徒弾圧を強化していた(1567年にはアルバ公の悪名高い「血の評議会」が設立される)。ネーデルラント以外にも眼を向けると、フランスではいわゆるユグノー戦争の過程で、公然たる食人が見られたことはよく知られている。ブリューゲルの魚はまさしく、そうしたヨーロッパ規模での共喰いの状況の暗示だったと想定することが可能であろう。

魚=共喰い=食人という象徴連鎖をさらに裏づけるものとして、「寡婦と孤児との抑圧者は前2者よりも悲惨だ」(Orfani et Oppressor Viduae Crudelior Istis)という、少し謎めいたタイトルを持つ別の画像を参照してみよう(図6)。これはやはりネーデルラント出身のマルティン・デ・ヴォスとジャン=バティスト・フリンスの手になる銅版画であって、1580年前後に作成されたと見られている。つまり、スペインによる新教徒弾圧が苛烈をきわめるようになっていた時代の作品である。



図6 マルティン・デ・ヴォス/ジャン=バティスト・フリンス

## キャリバンの肖像

その前景左には、ブリューゲルが描いたものとよく似た共喰いの魚が、右の新大陸での食人のシーン（おそらくテオドール・ド・ブリを下敷きにしたと思われる）とともに並置されて描かれており、両者が同一の行為だと把握されていることが、疑う余地なく示されているのである。背景には戦うヨーロッパ人とインディオがいる。これが食人を原因とした戦闘であるなら、先住民に対する戦いの正当性を主張するものだと解釈できるであろうし、そうでないなら、たとえ相手が異民族であっても相戦うことは人間同士の共喰いに等しいという人道的訴えとなろう。さらには「だが、互いにかみ合い、共喰いしているなら、互いに滅ぼされないように注意なさい」（ガラテアの信徒への手紙 5. 15）という新約聖書のことばとの関連も考慮すべきかもしれない。とはいえ、ここでも魚が共喰いという観念と深く結びつけられていることは確実である。魚の特性が共喰いにあることは、このあともスピノザによってさえ確認されており<sup>20</sup>、決して偶然の産物とはいえない。魚が少なくともこの時代に寓意的に示すものは、このような文脈にあっては共喰いなのであり、それは間接的にであっても確実に「人喰い」と結びついているのである。

『テンペスト』にこうした寓意的な読みを当てはめるのは、決して強引でも恣意的なものでもない。というのは、シェイクスピア自身が、魚と食人との象徴的等置関係をはっきりと知っていたからである。それはただ『テンペスト』でのアロンゾーの嘆きを示されているだけではない。『ペリクリーズ』ではより明確であって「親方、魚はどうやって海のなかで生きているんでしょうかね」という漁夫の問いに対して、「人間が地上でやっているのと同じさ。でっかい奴がちっちゃい奴を喰うのさ」（Why, as men do a-land: the great ones eat up the little ones）と答えさせている（Per. 2. 1. 26-9）。このせりふで示されているのは、まさしくブリューゲル的な状況なのである。

キャリバンが魚と呼ばれるのは、彼のすがたかたちや臭いの問題だと単純に考えられるべきではあるまい。それは以上のような象徴的・寓意的な解釈連鎖のなかで、彼を人喰いへと引きつける記号作用の一部なのである。

そのほか、キャリバンが「ブチの犬ころ」（a freckled whelp）だとか（1. 2. 283）とか「犬ころ頭の怪物（puppy-headed monster）」とも呼ばれている（2. 2. 151-2）ことにも、若干の注釈をつけておくべきだろう。

この表現については、ハンキンスは「彼には犬のような耳がある」と見なしており（Hankins 1947: 795）、ヴォーン夫妻はそれを単に愚かな顔つきの形容にすぎないとしている（T-V & V: 216）。これに対してリンドレーは、カニバルの語源をラテン語の *canis*（犬）に求めて彼らを犬首人だとする「伝説」とのかかわりを指摘している。もっとも、リンドレーはそれについては否定的に評価している（T-Lindley: 154）。

こうした怪しげな語源論は別にしても、人喰いが犬のような相貌を持っていることは、シェイクスピアの時代にはいくつもの航海記で語られていたのである。たとえば、1591年に



図7 ローレンツ・フリースの犬頭人

マゼラン海峡を目指したキャヴェンディッシュの航海に関するジョン・ジェインズの証言では、「砂を空に投げ上げたり、野獣のように飛んだり走ったりしながら多数の野蛮人が船に押しかけてきたが、彼らは顔に犬の顔の仮面をつけていたか、彼らの顔が実際に犬の顔だったのであろう」と述べられている。彼らはただちにカニバルだと見なされている (Hakluyt's Voyages : 592-3)。ジョージ・ベッカムは「カニバルたちは人肉を食糧にする残酷な民であって、犬のような歯を持っている (have teeth like dogges)」(NAW 3 : 44) と述べている。また、サント・ドミンゴの先住民に関して、「彼らは絶えず戦っており、殺した敵や、捕まえたよそ者を喰う。彼らは人の唾を重視する。というのは、犬のように野蛮な仕方で (in a barbarous fashion like Dogges), 他人の口に唾を吐くからである。彼らや、他の西インド諸島やブラジルの連中は、人肉を喰うのでカニバルという名前と呼ばれる (are called by the names of Canibals, that will eat mans flesh)」(Purchas 18 : 404) といわれていることも参照されたい。リンドレーは上記の註において、16世紀初頭に描かれた人喰いの犬頭人の図像なるものに触れているが、これはたぶんローレンツ・フリースの『海図』(1525年)に収録されているものであろう。それはスージ・コリンによれば同書の「カニバリについて」という章にある図像である(図7)。そこでのフリースの解説では「カニバリは凶暴で恐ろしい連中であり、犬の頭 (hunß köpfen) を持ち、見るだにぞっとする彼らはヤヌアのクリストッフェル・ダウバー [ジェノヴァのクリストーバル・コロソ] が少しまえに発見した島の内部に住んでいる」といわれていた (Colin 1988 : 197)。

## キャリバンの肖像

このように、魚だけでなく犬も人喰いと深く結びついたイメージだったのであり、強い力でキャリバンをカニバルへと引き寄せるのである<sup>21)</sup>。魚や犬というキャリバンに付帯される形容は、彼の外観や匂いといった字義的な解釈ですませてしまうには、少々深刻にすぎる問題を提起している。

## おわりに

以上述べてきたのは、これまでは注目されたことがなかったと思われるいくつかの導線がキャリバンとカニバルをつないで『テンペスト』には張りめぐらされていることの確認である。これらの導線はテキストのなかに書き込まれてはいても、素朴な読解なら「残り滓のようにうっちゃってしまう」(ジャック・ランシエール)のような要素として存在している。しかし、シェイクスピアが意識しようとしまいと、彼のテキストのなかには、新大陸に延びているだけでなく、そこにカリブヤカニバルを包み込んでいる鬘が隠されており、キャリバンはまさしくそうしたところにおのれの「本性」をしっかりと潜ませていたのである。

日本でも最近の風潮にあわせて、『テンペスト』の基軸をイタリアでの権力抗争に置いて、「作中のキャリバンに食人種を思わせる要素は一切ない」のであって、「『キャリバン＝カニバル』説の根拠は意外に乏しい」という主張がなされている(正木 1995: 60-2)<sup>22)</sup>。だが、『テンペスト』のような牧歌劇のなかを人喰いの「要素」を直接に身にまとったキャリバンがうろつくわけがなく、「食人種を思わせる要素」は周延的で微細な表現に、しかも「象形文字」(フロイト)として書き込まれている。本稿はその解読作業の一部にほかならない。

## 注

- 1) これらの言説は一般に、植民地言説 (colonial discourse) と呼ばれている。もっともこの表現があまりに文字テキスト中心であって、新大陸をめぐって作成された多様で豊かな図像表現を排除しかねないとして、ウォルター・ミニョロは「植民地記号過程」(colonial semiosis) を推奨しているが (Mignolo 1995: 7-8)、私は基本的にそれに賛成である。なお、ラテンアメリカに関しては、少なくともその 16・17 世紀の歴史過程に植民地という規定を適用することはできないという、かなり根本的な批判がホルヘ・クローラ・デ・アルバによってなされており (Klor de Alva 1995)、それへの賛同者もいる (Adorno 1993)。もっとも私はそれが植民地主義の歴史的な諸段階 (とりわけ初期重商主義期における植民地把握の種別性) についての理解の弱さに由来する議論だと考えている。新大陸と植民地については別稿を準備中である。
- 2) ヒュームたちは『テンペスト』が狭義のコンテキストでは新大陸 (特にヴァージニア植民) とかかわっていても、広義のそれはハクルートやパーチャスの航海記集成と関係するとして (Barker and Hulme 1985: 236)、決して新大陸に問題を一本化していない。また、植民地言説派としてヒュームたちと並ぶポール・ブラウンも、新大陸だけでなく、アイルランドをも重視している (Brown 1985)。アイルランドの抑圧が新大陸での植民地主義を準備したことは、ス

ペインのアメリカ征服がカナリア諸島の領有を前提としていたこととともに、さらに考えるべきだろう。

- 3) フロイトは夢の解釈作業において、夢の潜在的内容はおよそ汲みつくせるものではないといいながら、しかし、顕在夢で与えられる「断片や暗示から全体を完成しなければならない」(hat diesen Brocken oder diese Andeutung zum Ganzen zu vervollständigen) ことを強調している(『精神分析入門』第7講)。重層決定の確認だけで留まってしまうのは、知的怠惰の証拠にはかならない。
- 4) 日本での『ちびくろサンボ』をめぐる論争のなかで、サンボはシェルバ語かもしれないなどというので、すでに英語表現においてしっかりと確立していた蔑称の力を削ぐ反動的な試みがなされていたことも想起されたい。
- 5) とはいえ、私が主に参照したのは3つの地図集成(Shirley 1983; Nebenzahl 1990: Wolff ed.: 1992)であり、悉皆調査とはとうていいえないことを断っておく。
- 6) 「アセバドの報告にある首長カリバーナは、疑いもなく普通名詞であって、その語源は、オレリヤーナの隊員たちが聞いた地名カリバーナあるいはカリプーナ、あるいは、ロウリーが優れた体格について語っているオリノコのカリバーナと同じに違いない。コロンがすでにエスパニョーラ島において、カリバータと呼ばれる地方を見だしていたことを忘れてはならない。この地名はのちの記録者たちによってカリバーナと変容されており、このカリバーナ、つまり『カリブたちの祖国』にアロンソ・デ・オヘダは要塞を築いた。」(Gil 1989: 80)
- 7) 同じような移動は、やはりはじめはクリストーバル・コロンによってカリブ地域にいたとされる女族アマゾンにも見られる。そこで「発見」されなかった彼女たちは、やがてヌエバ・エスパニーヤ(メキシコ)やブラジルへと「移住」しているのである。
- 8) ラテン語の原文と翻訳を挙げておく。Inde Vrabam ab Orientali prehendit ora, quam appellant indigene Caribana, vnde Caribes insulares originem habere nomen que retinere dicuntur. (Martyr 1965: 79) 「そこから東のはしをかすめてウラバに向かったが、その土地を先住民はカリバーナと呼んでおり、カリベという島人の名前はそこから由来しているのだといわれている。」
- 9) 若干の例を挙げると、ヴァルトゼーミュラー(1513年)、ラウレント・フリース(1522年)、ゲンマ・フリシウス/ペーター・アピアン(1544年)はCanibalesを(Nebenzahl 1990: 64-5; Shirley 1983: 54, 93)、ゼバステイアン・ミュンスター(1532年)はCanibaliを採用している(Shirley 1983: 74)。
- 10) ハクルートに収録されているジョン・イヴィシヤムの北アフリカ航海記も“Towne of Argier”と記していたし(T\_V & V: 49)、アニア・ルーンバは『アルジェからの帰還』(A Returne from Argier)という同じ題名を持つ2冊の本を挙げている(Loomba 2002: 174)。
- 11) 例外的にグリーンブラットは「シェイクスピアはキャリバンに貴族のプロスペローを打倒するために、下層階級のステファノーとトリンキュローと同盟を結ばせることで、17世紀初頭の階級恐怖に訴えてさえいる」(Greenblatt 1990: 38)と述べている。だが、この言及はただか脚注においてなされているだけであって、はっきりと主題化されているわけではない。キャリバンの叛乱は明らかに垂直的な顛倒を意図しているが、そこに反植民主義がどのように介在しているのかは、さらに追求されるべきテーマである。日本では花田清輝が「プロスペローとキャリバンとの対立は…植民地における支配民族と被支配民族との対立」だとして、両者を単純な階級対立に翻訳したルナンを一蹴していることも参照されたい(「ホイッスルについて」

『さちゅりこん』花田清輝著作集 III, 未来社, 1964年, pp. 407-16.)。

- 12) ハクルートはさらに、放置しておくとは彼らは共喰いをしかねないとも付言している。「彼らはおたがいに喰いあいかねない」(they are ready to eat up one another) とされるのである (NAW 3: 82)。人喰いは困窮した民衆が滑り落ちる究極のところに出現するらしい。事実、ジェイムズタウンが極度の飢えで苦しめられたさいにはイギリス人のあいだで人喰いが発生しているの、これはただの空想ではない (Price 2003: 128)。なお、ハクルートから400年もたったあとのことになるが、セシル・ローズは「諸君が内乱を欲しないならば、諸君は帝国主義者にならなければならない」と断言している (V・I・レーニン『帝国主義』宇高基輔訳, 岩波文庫, p. 131. による)。内乱への恐怖が対外的膨張へと直結する「論理」は、すでに16世紀に準備されていたのである。
- 13) ジャック・ケイドはさらに、いっさいのものの共有という共産思想を宣言するが (2Henry6 4. 2. 64; 4. 7. 16), この共有観念は『テンペスト』においては、ゴンザーロが口にするので (2. 1. 160), キャリバンの叛乱からは切り離されてしまっている。このことはフェルナンデス・レタマルが鋭く指摘している (Cf. Fernández Retamar 1971: 127)。キャリバンは早々と「この島は母さんのシコラックスがくれたから俺のモノ (mine) だ」(2. 1. 332) ということ、おそらくはプロスペローが到来する以前には持っていなかったであろう私的所有観念 (meum et tuum という区別) がすでに彼に定着してしまっていることを告げている。それゆえに、共有思想からは遠ざけられるのである。

ところで、ゴンザーロが表白する素朴なユートピア思想については、多くの論者がモンテニュからの影響を挙げているが、ピエトロ・マルティーレ・ダンギエラの記述を重視すべきだという見解もあり (Cro 1990), 私はそれに賛成である。マルティーレはこう述べている。「よく知られているように、彼らは太陽や水と同様に、大地を共有しており、すべての悪のもとである『私のものと汝のもの』[という区別]を持っていない」(Compertum est apud eos, velut solem et aquam, terram esse communem neque "meum aut tuum", malorum omnium semina, cadere inter ipsos.) (Martyr 1996: 53)。また、イタリアのニコラ・シッラチョも1494年12月13日の手紙で、新大陸の住民に関して、「彼らの習慣はすばらしく、すべてが共有され、貪欲さはまるで見られず、これは私のもの、これは汝のものというのは恥とされる」(mores illis placibiles: omnia communia, avaritiae nulla suspitio, non illud flagitiosum: hoc meum, hoc tuum) と報告している (cit. in Gerbi 1975: 39)。

- 14) この畸形性において、キャリバンがリチャード3世と非常に似ていることを、ここで指摘しておきたい。前者は「きゃつは姿と同様に態度もねじくれている」(He is as disproportioned in his manners/As is his shape) といわれ (5. 1. 291-2), 他方、後者は「おまえの態度は姿と同様にねじまがっているぞ」(As crooked in thy manners as thy shape) と断罪される (2Henry6 5. 1. 158)。彼らはともに「姿」(shape) と「態度」(manners) とにおいて常軌を逸しているといわれているのである。この意味では、ふたりは完全に互換可能である。もっとも、キャリバンの場合には、その畸形性はおそらく、「おまえが妨げなかったら、この島をキャリバンだらけにしてやったのに」とか、ミランダのせりふでは「おまえの卑しい種族」(thy vile race) といわれているように (1. 2. 351-2; 359), 彼の個別的な特徴というより、彼の「種族」全体のそれとされているが、グロスター公リチャードにあっては、「母の胎内」にあったとき「きゃつらの魔法によって」(by their witchcraft) 身体の歪みが生まれたとして (3Henry6

3. 2. 153; R3 3. 4. 72), 個的な畸形出産の結果とされている。集団として畸形であるか、個人の偶発的な事例なのかという違いである。なお、畸形出産については、『ヘンリー 4 世・第 2 部』(2Henry 4 4. 4. 121-2) や『オセロー』(Oth. 1. 3. 401-2) が直接に触れている。
- 15) 一例だけを挙げるなら、オスマン・トルコによる東ローマ帝国崩壊という事態に恐怖した教皇ニコラス 5 世は、ポルトガル王にあてた 1455 年の大教書『ロマヌス・ポンティフェクス』(Romanus Pontifex) において、戦争で捕らえた「サラセン人」を「恒久的な奴隷」にすることを公然と認め、かつ奨励している (Cf. Muldoon 1979: 134-5)。
- 16) 幸い、私たちはこの論争についての端正で詳細な分析を、いまでは日本語で読むことができるようになった (松森 2009: 第 2 章)。
- 17) tardos et hebetes, sed corpore validos ad obeunda necessaria munera, servos esse natura.
- 18) "Provisión para poder cautivar a los caníbales rebeldes," in: *Obras de D. Martín Fernández de Navarrete*, tomo I, BAE, tomo 75, pp. 552-3.
- 19) この冷淡さについては、エリオットの分析 (Elliot 1989) を参照。
- 20) 「例えば魚は泳ぐやうに、又大なるものが小なるものを食ふやうに自然から決定されてゐる。従つて魚は最高の自然権に依つて水を我物顔に泳ぎ回り、又大なるものが小なるものを食ふのである。」(『神学・政治論』 畠中尚志訳, 下巻, 岩波文庫, pp. 163-4.)
- 21) ピーター・ヒュームは犬によるインディオ攻撃を「イギリス人がみずからの植民地主義を、スペイン人のそれと区別する」ことに利用したという (Hulme 1986: 113)。実際にはイギリス人も同様だったのであつて、たとえばマーティン・プリングの記録によると 1603 年の北ヴァージニアへの探索航海において、彼らは「フル」と「ギャラント」と呼ばれる「インディアンがひどく恐れる 2 頭の優秀なマスティフ犬」を連れていった。この犬たちは「期待」にそぐわず、敵対的な「野蛮人」をけちらかしているのである (Purchas 18: 325, 328.)。この「フル」と「ギャラント」が『テンペスト』に登場する「マウンテン」「シルヴァー」「フューリ」「タイラント」(4. 1. 255-7) のモデルだったとは断定できないが、このような事実があつたことは注記しておきたい。さらに、犬がソドミーとのあいだに持っている濃厚な関係 (ヒュームが上記の箇所に掲載しているバルボアの画像を参照) については、異者化におけるカニバリズムとソドミーの補完関係を主張するフランソワーズ・マリの議論 (Mari 1986) などとともに機会を改めて考えることにしたい。
- 22) それはさらに、「キャリバン = 『カンニバル』というポストコロニアル批評の主張は、考証上 きわめて 根拠の 乏しい ものである」とまでエスカレートする (春日 1999: 374 — 傍点は引用者)。

#### 引用文献

- 『テンペスト』からの引用は  
*The Tempest*, ed. by Virginia Mason Vaughan and Alden T. Vaughan, London: Thomas Nelson and Sons, 1999. (T\_V & V として文中では引用) によつた。  
 他に『テンペスト』のテキストとしては、以下を参照している。  
*The Tempest*, ed. by Frank Kermode, Methuen: London, 1954. (同じく T\_Kermode)  
*The Tempest*, ed. by Stephen Orgel, Oxford: Clarendon Press, 1987. (同じく T\_Orgel)  
*The Tempest*, ed. by David Lindley, Cambridge: Cambridge Univ. Press, 2002. (同じく T\_Lindley)  
 その他のシェイクスピア作品については、基本的に

- The Arden Shakespeare Complete Works*, rev. ed., London: The Arden Shakespeare, 2001. によった。それ以外にたびたび引用するテキストについては、つぎのような略称を使用する。
- Arber ed. Edward Arber (ed.), *The First Three English Books on America*, Birmingham, 1885.  
BAE *Biblioteca de Autores Españoles*, Madrid.  
CDI *Colección de Documentos Inéditos, relativos al Descubrimiento, Conquista y Organización...en América y Oceanía*, 42 tomos.  
Hakulyte Voyages *Hakluyt's Voyages*, ed. by Richard David, Boston: Houghton Mifflin, 1981.  
NAW *New American World: A Documentary History of North America to 1612*, ed. by David B. Quinn, 5 vols., London: Macmillan, 1979.  
NMI *Nuovo Mondo. Gli Italiani*, a cura di Paolo Coello e Pier Luigi Crovetto, Torino: Giulio Einaudi, 1991.  
Purchas *Hakluytus Posthumus or Purchas His Pilgrimes*, 20 vols., NY: AMS Press, 1965.
- Adorno, Rolena 1993 "Reconsidering Colonial Discourse for Sixteenth-and Seventeenth-Century Spanish America," *Latin American Research Review*, pp. 135–45.  
Barker, Francis and Peter Hulme 1985 "Nymphs and Reapers Heavily Vanish: The Discursive Contexts of *The Tempest*", in: *Alternative Shakespeare*, ed. by John Drakakis, London: Methuen, pp. 191–205.  
Beckles, Hilary 1966 "The Concept of "White Slavery" in the English Caribbean during the Early Seventeenth Century," in: *Early Modern Conception of Property*, ed. by John Brewer and Susan Staves, London: Routledge, pp. 572–84.  
Bernheimer, Richard 1952 *Wild Men in the Middle Ages. A Study in Art, Sentiment, and Demonology*, Cambridge: Harvard Univ. Press.  
Blackburn, Robin 1997 *The Making of New World Slavery: From the Baroque to the Modern, 1492–1800*, London: Verso.  
Broc, Numa 1986 *La géographie de la Renaissance 1420–1620*, Paris: CTHS.  
Brown, Paul 1985 "'This Thing of Darkness I Acknowledge Mine': *The Tempest* and the Discourse of Colonialism.", in: *Political Shakespeare. New Essays in Cultural Materialism*, ed. by Jonathan Dollimore and Alan Sinfield, Manchester: Manchester Univ. Press, pp. 38–71.  
Brower, Reuben A. 2000 [1951] "The Mirror of Analogy: *The Tempest*," in: Graff and Phelan (eds.), pp. 183–202.  
Callaghan, Dymna 2000 *Shakespeare Without Women: Representing Gender and Race on the Renaissance Stage*, London: Routledge.  
Cohen, Walter 2001 "The Undiscovered Country: Shakespeare and Mercantile Geography," in: *Marxist Shakespeare*, ed. by Jean E. Howard and Scott Cutler Shershow, London: Routledge, pp. 128–58.  
Colin, Susi 1988 *Das Bild des Indianers im 16. Jahrhundert*, Idstein: Schulz-Kirchner.  
Cro, Stelio 1990 *The Noble Savage: Allegory of Freedom*, Ontario: Wilfrid Laurier Univ. Press.  
Cuneo, Michele de 1991 "Lettera a Girolamo Annari [1495]," in: NMI, pp. 101–9.  
Draper, John W. 1992 (1966) "Monster Caliban," in: *Caliban*, ed. by Harold Bloom, New York/Phila-

- delphia: Chelsea House, pp. 89–94.
- Elliot, John Huxtable 1989 *Spain and Its World, 1500–1700*, New Haven: Yale Univ. Press.
- Enciso, Fernández de 1987 *Suma de Geografía*, Madrid: Museo Naval.
- Fernández de Oviedo, Gonzalo 1950 *Sumario de la natural historia de las Indias*, México: FCE.
- Fernández Retamar, Roberto 1971 “Caliban,” *Casa de las Américas*, No. 68, pp. 124–51.
- Gerbi, Antonello 1975 *La natura delle Indie nove. Da Cristoforo Colombo a Gonzalo Fernandez de Oviedo*, Milano/Napoli: Riccardo Ricciardi.
- Gil, Juan 1989 *Mitos y utopías del Descubrimiento*, tomo 3 (El Dorado), Madrid: Alianza.
- Gillies, John 2000 “The Figure of the New World in *The Tempest*,” in: “*The Tempest*” and Its Travels, ed. by Peter Hulme and William H. Sherman, Philadelphia: Univ. of Pennsylvania Press, pp. 180–201.
- Graff, Gerald and James Phelan (eds.) 2000 *William Shakespeare The Tempest: A Case Study in Critical Controversy*, Boston/New York: Bedford/St. Martin’s.
- Greenblatt, Stephen 1988 *Shakespearean Negotiations: The Circulation of Social Energy in Renaissance England*, Berkeley/Los Angeles: Univ. of California Press. 酒井正志訳『シェイクスピアにおける交渉』法政大学出版局
- 1990 *Learning to Curse: Essays in Early Modern Culture*, London: Routledge. 磯山甚一訳『悪口を習う』法政大学出版局
- Hanke, Lewis 1959 *Aristotle and the American Indians*, Bloomington: Indiana Univ. Press. 佐々木昭夫訳『アリストテレスとアメリカン・インディアン』岩波新書
- Hankins, John H. 1947 “Caliban the Bestial Man,” *PMLA*, 62, pp. 793–801.
- Hamlin, William M. 1995 *The Image of America in Montaigne, Spenser, and Shakespeare: Renaissance Ethnography and Literary Reflection*, London: Macmillan.
- Hulme, Peter 1986 *Colonial Encounters: Europe and the Native Caribbean 1492–1797*, London: Methuen. 岩尾龍太郎ほか訳『征服の修辞学』法政大学出版局
- Jordan, Constance 1997 *Shakespeare’s Monarchies. Ruler and Subject in the Renaissance*, Ithaca: Cornell Univ. Press.
- Kastan, David Scott 1999 *Shakespeare after Theory*, London: Routledge.
- Klor de Alva, J. Jorge 1995 “The Postcolonization of the (Latin) American Experience: A Reconsideration of “Colonialism,” “Postcolonialism,” and “Mestizaje,” in: *After Colonialism: Imperial Histories and Postcolonial Displacements*, ed. by G. Prakash, Princeton: Princeton Univ. Press, pp. 241–75.
- Las Casas, Bartholomé de 1977 [1583] *The Spanish Colonies,...*, Amsterdam: Theatrum Orbis Terrarum.
- Loomba, Ania 2002 *Shakespeare, Race, and Colonialism*, Oxford: Oxford Univ. Press.
- López de Gómara, Francisco 1946 La historia general de las Indias, in: *Historiadores primitivos de Indias*, BAE, tomo 22.
- Maltby, William S. 1971 *The Black Legend: The Development of Anti-Spanish Sentiment, 1558–1660*, Durham: Duke Univ. Press.
- Mari, Françoise 1986 “Les indiens entre Sodome et les scythes: Un aspect de la perception morale des

- premiers Européens en Amérique,” *Histoire économie et société*, 5, pp. 3–30.
- Martyr de Angleria, Petrus 1885 [1555] *The Decades of the newe worlde or west India*,...in: Arber ed.  
———1966 [1530] *Opera*, Graz: ADEVA.
- Mignolo, Walter 1995 *The Darker Side of the Renaissance: Literacy, Territoriality, and Colonization*,  
Ann Arbor: Univ. of Michigan Press.
- Muldoon, James 1979 *Popes, Lawyers, and Infidels*, Philadelphia: Univ. of Pennsylvania Press.
- Nebenzahl, Kenneth 1990 *Atlas of Columbus and the Great Discoveries*, Chicago: Rand McNally.
- Ortelius, Abraham 1968 [1606] *The Theatre of the Whole World*, Amsterdam: Thetrum  
Orbis Terrarum.  
———1991 [1570] *Theatrum Orbis Terrarum*, 臨川書店
- Pagden, Anthony 1985 *The Fall of Natural Man: The American Indian and the Origins of Comparative  
Ethnology*, Cambridge: Cambridge Univ. Press.
- Palencia-Roth, Michael 1993 “The Cannibal Law of 1503,” in: *Early Images of the America: Transfer and  
Invention*, ed. by Jerry M. Williams and Robert E. Lewis, Tucson: Univ. of Arizona Press, pp. 21–  
63.
- Price, David A. 2003 *Love and Hate in Jamestown: John Smith, Pocahontas, and the Heart of a New Na-  
tion*, New York: Alfred A. Knopf.
- Shirley, Rodney W. 1983 *The Mapping of the World: Early Printed World Maps, 1472–1700*, London:  
Holland.
- Srigley, Michael 1985 *Images of Regeneration: A Study of Shakespeare's The Tempest and Its Cultural  
Background*, Stockholm: Almqvist & Wiksell.
- Skura, Meredith Anne 1998 (1989) “Discourse and the Individual: The Case of Colonialism in *The  
Tempest*,” in: *Critical Essays on Shakespeare's The Tempest*, ed. by Virginia Mason Vaughan and  
Alden T. Vaughan, New York: G. K. Hall & Co., pp. 60–90.
- Vaughan, Virginia Mason and Alden T. Vaughan 1991 *Shakespeare's Caliban: A Cultural History*, Cam-  
bridge: Cambridge Univ. Press. 本橋哲也訳『キャリバンの文化史』青土社
- Warren, Roger 1998 [1990] “Rough Magic and Heavenly Music: *The Tempest*,” in: *Critical Essays on  
Shakespeare's The Tempest*, ed. by Virginia Mason Vaughan and Alden T. Vaughan, New York: G.  
K. Hall, pp. 152–89.
- Wolff, Hans (ed.) 1992 *America. Early Maps of the New World*, München: Prestel.
- Zavala, Silvio 1967 *Los esclavos indios en Nueva España*, México: El Colegio Nacional.  
———1975 *Servidumbre natural y libertad cristiana según los tratadistas de los siglos XVI y XVII*, 2a  
ed., México: Porrúa.
- Zimbaro, Rose Abdelnour 1968 “Form and Disorder in *The Tempest*,” in: *Shakespeare: The Tempest.  
A Selection of Critical Essays*, ed. by D. J. Palmer, London: Macmillan, pp. 232–43.
- 春日直樹 1999 「『テンペスト』の弁明——植民地主義批判に対して」 栗本英世ほか編『植民地経験  
——人類学と歴史学からのアプローチ』人文書院. pp. 366–82.
- 松森奈津子 2009 『野蛮から秩序へ——インディアス問題とサラマンカ学派』名古屋大学出版会
- 正木恒夫 1995 『植民地幻想 イギリス文学と非ヨーロッパ』みすず書房

図版出典

図1 ツオルツイ地図

Kenneth Nebenzahl, *Atlas of Columbus and the Great Discoveries*, Chicago: Rand Mc Nally, 1990

図2 ヴァルドゼーミュラー地図 (部分)

Nebenzahl, op. cit.

図3 クンストマン2地図 (部分)

Hans Wolff (ed.), *America: Early Maps of the New World*, München: Prestel, 1992.

図4 ゼバステイアン・ミュンスター地図 (部分)

Wolff, op. cit.

図5 ブリュージェル「大いなる魚は魚たちを食べ物にする」

鈴木健二編『ブリュージェルの版画』(岩崎美術社, 1994年)

図6 マルティン・デ・ヴォス / ジャン＝バティスト・フリンス「寡婦と孤児との抑圧者は前2者よりも悲惨だ」

*La Renaissance et le Nouveau Monde*; Quebec: Bibliothèque nationale du Québec, 1984.

図7 ローレンツ・フリースの犬頭人

*Encountering the New World, 1493 to 1800*, Providence: The John Carter Brown Library, 1991.